

中長期目標	○未来に向かい 自分らしく輝き 豊かに生きる子どもの育成	今年度の 重点目標	○自己肯定感を高め、主体的に取り組む児童生徒の育成 ○質の高い職職員集団の実現 ○安全で安心な学校の実現 ○「チームくらよう」の推進
-------	------------------------------	--------------	---

年 度 当 初						評 価 結 果 (10)月		
評価項目	部	評価の具体項目	現 状	目 標 (年度末の目指す姿)	目 標 達 成 の た め の 方 策	経 過 ・ 達 成 状 況	評価	改 善 方 策
自己肯定感を高め、主体的に取り組む児童生徒の育成	A 部門	○子どもたちが主体的に学習に取り組み、一人一人の方法で表現する力を育む授業づくり	○ルーティーンになっている流れで見通しを持って生活・学習することができている。 ○関わりの多い教職員だけでなく、普段、関わりの少ない支援者からの働きかけにも個々の方法で答えることのできる姿が増えてきているが、さらに「いつでも、どこでも、誰とでも」コミュニケーションをとることができるよう、それぞれの対応力、表現力を高めていく必要がある。	○様々な学習活動を通して、児童生徒が主体的に取り組み、一人一人の方法でいろいろな人に気持ちを伝えたり、表現したり、関わろうとしたりする姿が見られる。 ※教員の8割以上が「できた」と回答	○児童生徒が主体的に取り組む姿についての研修会を開催する。 ○児童生徒が主体的に取り組む姿とはどのような姿なのか、学部で共通理解し授業づくりに向かう。また、教職員間で効果的な授業づくりについての情報共有を行う。 ○関わりの多い指導者との関係性でできていることを、「いつでも、どこでも、誰とでも」できる力へとつなげていくことができる活動、有効な支援ツールや教材・教具等について情報共有する。	○研究部と連携し、7月に畿央大学の山根康代准教授をお迎えし、教職員対象の研修会を行った。また、学部の研究日には研究部による児童生徒の主体的な学びとはについての研修を行っている。同時に研究日には子どもたちの姿と授業づくりについての情報交換を行っているが、回数が少ないこともあり、効果的な授業づくりについての十分な情報交換ができてはいない。 ○教職員間で、支援ツールや教材・教具等についての情報共有を行うことができているが、まだ十分とは言えない。	C	○引き続き、学部の研究日やグループの会などを利用し、授業づくりや支援ツール、教材・教具等についての情報交換、情報共有をしていく。
	B 小学部	○主体的に活動したり表現したりする姿へ繋げる指導・支援の工夫	○児童の達成感や主体的に活動する意欲・姿を育むため、教育活動全般を通して、様々なアセスメントからの児童の実態把握や情報共有を行い、発達段階に応じた表出や表現できる学びの場を作っていく必要がある。	○児童が学校生活場面の中で、自分で伝えたいことや表現したいことを、主体的に自分なりの方法で表出したり表現したりする姿が見られる。 ※教員の8割以上が「できた」と回答	○担任だけではなく、教員間でも児童の実態や目指す姿や、そこに向かう段階を共有(授業計画で、グループ会で、日常のコミュニケーションで、等)し、学習内容や指導・支援方法を検討して、評価・改善を行っていく。 ○児童の表出力や表現力を広げるために、有効な支援ツールや教材・教具の情報共有を図る。 ○児童、保護者のニーズをしっかりとキャッチすると同時に、学校生活での様子や学習の広がりについて、保護者や関係機関と共有し、連携を取っていくことを継続する。	○第1項目 目標達成のための方策 アンケート結果→できている81% 関係教職員でコミュニケーションを取りながら情報共有、支援・指導について検討等ができている。児童の伝えたいことを受け止め、指導者がわかりやすく言葉に置き換えるようにして確認することに取り組んだ。一方、単元や授業の計画、グループ内での授業の情報共有、評価についての課題が挙げられている。 ○第2項目 目標達成のための方策 アンケート結果→できている81% 支援ツールなど教え合ったり真似したりしながら実践に活かしている。実態に応じたグループでの学習においては、生活場面での般化をねらい、実際に学んだ表現方法を使う姿がある。どの指導者でも対応できるよう、カード等のツールを準備し伝えることで、児童が安心して伝える場面もある。ICTを使った学習により、ひらがなを積極的に読んだり、画面を見て考えを伝えたりするなど、有効的な活用場面が増えている。一方、他の指導者の授業を参観する機会が少ないため、ドライブ等を活用し、支援ツールや児童の実態を適宜確認できる方法等の提案がある。 ○第3項目 目標達成のための方策 アンケート結果→できている94% 日々の学習の様子や行事での成長を、様々な方法でリアルタイムで伝えている。支援会議や懇談でも、情報共有が図れている。療育園の大学教授等、専門的な見知から、個別配慮児童の対応の仕方を見直し、実践に繋げている。通学に関することで、保護者への情報提供や依頼が遅れてしまいご迷惑をおかけした事案もあったので、関係者で再確認をした。	B	○今後も指導者間でしっかりと学習や単元を振り返り、効果的な支援や学習内容の共有、また次単元や次年度に向けて改善できる点を話し合い、授業作りをしていく。また、児童の状況に応じて、積極的にケース会議を開くなど、個に視点を当てたアプローチの仕方についても検討していく。 ○ICT機器の有効活用は継続するが、ICT機器では補えない、実物の良さや板書等、活動・学習内容の工夫に努めていく。 ○関係機関から得た情報は、しっかりと関係指導者で共有を図り、よりよい支援・指導を実践していく。

様式 3

	B 中学部	○表現力の育成を目指した授業の充実	○昨年度、伝え方や言葉遣い等に課題が見られ、生徒同士のトラブルにつながることもあったが、指導者が速やかに対応したことで、よりよい関わり方が知ったり改善しようという姿勢が見られるようになった。 ○新年度になり、教師や友だちとの関係や学習環境が変化したことにより、自分から気持ちが伝えにくい姿も見られる。	○相手を意識した伝え方を身につけ、自分の気持ちや思いを伝えることができる。 ※教職員アンケートで8割以上が「できた」と回答 ※生徒アンケートや学習の記録から評価	○身につけた力を様々な学習場面で活用できるように、学習活動全体を通して、自己表現やよりよい人間関係づくりを目指した活動内容の設定や共通した支援を行う。 ○安心して自分を表現することができるよう、生徒と指導者、生徒同士の関係づくりを行う。 ○生徒の実態把握や授業づくり、支援などのうまくいった事例や改善策などを、学習グループや学部内で情報共有する。	○前期の振り返りアンケートでは、写真カードやジェスチャーの活用、丁寧な言葉遣い・感情カードなどの視覚的提示といった支援を活用したことで、生徒の伝え方が向上したり、生徒が思いを伝えることが増えてきたりしていると感じている教員が多かった。（「そう思う(できている)」:1割、「だいたいそう思う(できるようになってきた)」:7割) ○生活の中の生徒の様子から、生徒がしたいことや思ったことを安心して学校で表現できる状況づくりが必要だと感じている教員も多い。（いいことばかりでなく、不安や嫌だという気持ちも安心していないと表現できないのでは？という意見。） ○目標達成の「表現できる」姿についての共通理解や、達成に向けて必要な支援・環境づくり・授業づくりについて、もっと意見交換・情報交換することが必要である。	B	○生徒の目指す姿について機会をとらえて意見交換する。 ○単一グループ、重複グループ問わず、学部全体で生徒が安心して、豊かに自分の思いや気持ちを表現できる環境づくり、授業づくりに向けていろいろなアイデアを出し合ったり、見聞きた実践事例などの情報を交換しあったりできる場を設定する。（学部会、グループ会、学部掲示板を活用して） ○生徒の言動について、背景にあることを探りながら必要な支援の糸口を探るようにする。
	B 高等部	○周りの人とやりとりをする中で、自分の意思や、なぜそう考えたかを相手に伝えることができる生徒の育成	昨年度、ICT機器を利用した学びを通して、やりとりができる生徒の育成に取り組んだ。単一障がい学級の生徒においては、ICT機器を利用して、興味があることやわからないことを自分から進んで調べたり、自分の考えをまとめて相手に伝わるようにプレゼンを作成し、発表することができた。また、質問、意見など、周りの友だちとのやりとりが増えた。重複障がい学級の生徒においては、ビデオで自分の姿を観て、即時にふりかえることで、がんばったことや、次にがんばりたいことをより意識して、選択、発表することができた。	①周りの人とやりとりをする中で、自分の意思を相手に伝えることができる。 ②周りの人とやりとりをする中で、なぜそう考えたかのか、自分の考え方を相手に伝えることができる。 『意思、考え』→結論 『考え方』→結論に至るまでの過程（どう考えたか） アンケートを実施し、①②とも70%以上の指導者ができたと回答したらA、一つでも、できたが70%であればB、両方ともできたが70%以下であればC評価とする。	○昨年度取り組んだICT活用のよさを活かした授業の中で、指導者もしくは、生徒同士のやりとりを活発に行う。 ○まずは指導者が、生徒とのやりとりの中で、意思を聴いて終わりではなく、なぜそう思ったのか（なぜそう考えたか）を生徒と問答するようにする。そして、生徒の考え方を整理し、○○だから（理由）、××の考えを選んだ（結論）と、話すことができるようにする。 ○キーノートなどのスライド作りやワークシートを利用して、考え方の過程を可視化しながら、ふりかえることができるようにする。	○5月のアンケートでは、①周りの人とやりとりをする中で、自分の意思を相手に伝えることができる→できている19. 2%、できていない26. 9%、どちらとも言えないが53. 8%。昨年度末96%がやりとりができているだったが、学部の先生の約3分の1が入れ替わったことや、生徒の入れ替わりがあることで、この数字になったと思われる。9月末アンケートでは、①参加コース、できていたが51%、生活コース53. 8%ができていたに回復した。学部目標や学部研究の研修を行う中で、今年度何に取り組むかについて、学部の先生に理解いただいた結果だと思われる。しかし、今年度新たな目標としてあげた②周りの人とやりとりをする中で、なぜそう考えたのか、自分の考え方を相手に伝えることができるについては、参加コース、できていたが35. 7%、生活コース、7. 7%だった。先生方のふりかえりとして、授業の中で（考え方を問う）設定ができていなかった、（指導者側が）考え方を引き出すことができていなかったなどがあげられていた。今後の授業研の取り組みを通して、目標達成を目指し取り組んでいきたい。		○1学期から夏休みにかけて学部研修で積み重ねてきた単元計画や授業の中身の工夫等を考える取り組み（単元計画シート、研究シート）を活用し、実際の授業実践を適宜ふりかえりながら、意思を伝える、考え方を伝えることができる授業づくりに取り組む。 ○学部研の中で、お互いの授業実践をみながら学ぶ機会を作り、授業の中で、どのように考え方を問うていくか、生徒が、どのように考えたかをどう引き出していくかについて、指導者間で学び合う。

様式 3

年 度 当 初					評 価 結 果 (10)月			
評価項目	部	評価の具体項目	現状	目標(年度末の目指す姿)	目標達成のための方策	経過・達成状況	評価	改善方策
質の高い教職員集団の実現	研究部	○児童生徒が主体的・対話的になるような授業づくり	○授業公開を通して、表現力向上をめざした授業の工夫を知ることができた。他学部の授業を見る機会を得られたこと、良い点を知ること、伝えることができたことは、発表者にとっても参観者にとっても実りある研究となった。今年度は、良いところだけでなく、建設的なやりとりにより改善点等も話し合うことができるような授業公開としたい。	○授業づくりを通して、児童生徒の表現力を向上することができる。 ※教職員アンケートで8割以上が「できた」と回答	○授業者が実態・目標・授業の工夫がわかるシートを準備する。 ○授業者と参観者が授業について建設的に話し合うことができる「授業公開」となるような場を設定し、負担なく、いつもの授業をPDCAサイクルでできる土台となるものとすることを強調して教職員に伝える。	○今年度は、島根県立大学の水内豊和先生より指導助言を受けることになった。8月には「発達段階に応じたICT活用」「卒業後を見据えたICT活用」というテーマで、研修を行った。演習や講義を通して「表現力」を拡げるためのICT機器の活用等について学ぶ第1歩となった。また、主体的・対話的な授業づくりにつながるような、「ロボットをプログラミングして動かす」ことなどを学んだ。グループで話し合いながら演習を進め、生徒も興味を持って主体的に学習できるヒントとなった。 ○授業公開に向けて、各学部で取り組みを進めているところである。10、11月の学部研に向け、学部内でそれぞれの授業について動画を見て話し合う予定である。		○建設的な話し合いを推進するために、各学部での授業公開の際には、発表者が気負うことなく発表でき、話し合うことの大切さを重ねて伝える。
	教務部	○児童生徒の学習状況をより客観的に評価できる規準の作成 ○教育水準の維持向上と働き方改革を兼ねた諸帳簿の整理	○児童生徒の実態に応じた教育課程の編成が年次で行われている。 ○指導に際して、学習の立案は必要項目となっているが、評価への意識の定着が薄い。しかしながら多忙な毎日に評価までは手がつかないようにも感じている。 ○指導者が作成する諸帳簿に関して、学校のオリジナルのもので展開している。	○よりスリムな評価のシステムを構築を目指して、各教科の学習を評価する際の規準を校内で作成する。 ○新しい形の個別の指導計画への移行を年度内に行う。	○学習部の先生を中心にして、作業をすすめる。より同じ意識で作業に取り組めることができるように教務部として研修を企画・運営を行う。 ○他校の書式等を参考にしながら、国や県の動向を踏まえた書式かつ業務の削減につながるものに仕上げていく。	○他校との情報交換を行う中で、各教科の評価を行う際の規準を設けることができたが、形として揃ったに過ぎず、評価規準の価値や運用については夏の研修のように繰り返して先生方への発信を行っていく。 ○来年度以降の諸帳簿等の形が出来上がってきた。形式の移行に向け、先生方への繰り返しの説明を通して意識を高めて行くと同時に、新しい形式の計画等がスムーズに作成できるように具体的な日程調整を行いながら進めていく。	C	○来年度からの新しい諸帳簿や評価のシステム等の考え方について、継続して先生方へ周知徹底を図るために職員会等を活用しながら根拠に基づいた丁寧な説明を行っていく。また、来年度以降の教務に関する業務の流れのイメージを共有しながら業務を進めていく。
	全体	○時間外業務の原因把握と業務カイゼンの推進	○個々の業務を見直し、継続的に業務量の平準化を図る必要がある。 ○前年度比で月45時間、年間360時間を超えて時間外勤務をする実態がある。	○日々勤務簿の自己管理を徹底するとともに、教職員アンケートに回答する形で自ら業務カイゼンに参画し、その具体的な改善策を具現化していく。 ※教職員アンケートで8割以上が目標達成のための方策を「できた」と回答	○会議をしない日やノー残業ディを設定し、早期退勤への意識を高めるとともに計画的に勤務をする環境を整え。勤務簿の自己管理の徹底を図る。 ○業務カイゼンに関する教職員アンケートを実施し、一人ひとりが業務カイゼンに向けての意欲を高めるとともに自ら考えた改善策を学校全体で具現化に取り組む。	○教職員の94.0%が日々勤務簿の自己管理を徹底するとともに、教職員アンケートに回答する形で自ら業務カイゼンに参画し、その具体的な改善策を具現化していると回答した。 ○夏季休業中に業務カイゼンに関する教職員アンケートを実施し、一人ひとりが業務カイゼンに向けて自ら考えた改善策を提案し、意欲を高めることができた。	B	○一人ひとりが業務カイゼンに向けて自ら考えた改善策を今後、その具体化に学校として取り組んでいく。

様式 3	事務部	○事務の効率化と「チーム事務室」の推進	○事務室内で協力し合いながら業務を行っているが、担当者以外が対応できないこともあり、不在の場合対応が遅れることがある。	○各自の業務がわかりやすく整理され、保護者や業者への対応、職員からの相談についての初期対応が担当者以外でもできる。	○各自が担当業務について改善できる点を見つけ実践する。担当者以外でも対応できるようDB等を使ってマニュアル化する。	○各自が担当業務の改善に取り組んでいるが、マニュアル化が進んでいない。	C	○業務マニュアルを作成し、担当者以外でも対応できるようにしていく。
	健康教育部	○児童生徒の健康増進に向けた学習の充実と環境整備	○新型コロナウイルス感染症も5類に移行し、児童生徒の健康に関する課題も変化しつつある。コロナ過において給食指導やはみがき指導が不十分になり、歯肉炎の生徒が全校で約15パーセントいる。また、黙食の徹底により、給食中の指導もできず、食育も行き届いていない。さらには、保健体育の学習においてもマスクの着用、非接触等、制限のある学習が多く、運動の機会が減少している。	○歯肉炎の予防に向けてはみがき指導の充実が行われる。 ○肥満傾向の生徒は本県全体に比べて2～2.5倍であるが、減少傾向に向かっている。 ○性に関する指導や児童生徒の健康増進に向けた学習の教材が整理され、指導者一人一人が保健指導において「おおむねできた」と回答できた割合が8割を達成している。	○全国小学生はみがき大会の活用や、性に関する指導、日常生活の指導部、保健体育部等、複数の学習部と連携する。 ○児童生徒が歯磨きをすることの大切さを理解し、毎日の歯磨きを丁寧に行う。歯磨き指導や健康増進に向けた学習の充実を図れるように外部講師を活用する。	○保健室と連携し歯周病や歯肉炎の生徒の家庭に対して、受診を勧めた。また、小学部では全国小学生はみがき大会に参加し、歯磨き指導の充実を図った。 ○教職員の78%が性に関する指導の教材整理について「そう思う」「だいたいそう思う」と回答したが、学習教材データや実物教材の保存場所、保管場所の周知が充分ではなかった。 ○高等部において、性に関する指導の充実を図るため、2学期に歯科医、歯科衛生士さんをお招きして講義、演習を行う予定である。 ○教職員を対象に夏期研修において、健康教育に関する研修を行い、日頃先生方が困っておられる、肥満防止に関する運動や体幹を鍛えるための運動等についての講義・演習を行った。	C	○学習教材のデータ保存場所等を各学部の健康教育部中心に整備し、また活用できるように各学部の教員へ伝える。 ○性に関する指導（歯磨き指導等）の充実に向けて、外部講師を活用していく。
	安全・環境部	安全で安心な学校の実現	○安全・安心への意識と体制作り ○より安全・安心な教育環境	○児童生徒が安全・安心な環境で学習できるよう避難訓練や安全点検、ヒヤリハットでの情報共有、課題への対応を適切に行っている。 ○安全・安心な教育環境づくりを行うとともに、エコに対する意識が高まる。 ※職員作業の実施(年2回) ※掃除道具点検の実施(年2回) ※水道・電気の使用量で、昨年度との比較を周知する。 ※エコ点検で◎の割合が6割以上	○安全点検を適切に行い、事務部への報告を行う。 ○安全・安心への意識を高める体制作りを行うことができるように、避難訓練の方法などを検討・見直しをしながら計画、実施する。 ○年に2回の職員作業を計画実施し、安全安心で無駄のない環境づくりを行う。 ○委員会・分掌と連携し、環境に関する啓発をしていく。 ○電気、水の使用に関してエコにつながる具体的な取り組みを示すとともに、掲示板にTEAS報告を載せ、全校への意識づけを行ったり、職員への協力を呼びかけたりする。	○ヒヤリハット事例の積極的な入力と呼びかけるとともに、職朝の時間を利用して、ヒヤリハットの事例を教職員で共有し、留意点を共通理解することができた。 ○毎月安全点検を行った。不備のある箇所について報告し、順次修理や改善をしている。 ○火災の避難訓練では、火元に近い教室の児童生徒はよりすばやく避難するよう周知し、迅速に行動しながら訓練を行うことができた。 ○教職員対象に警察署の方を招いて不審者対応研修を行った。不審者侵入時の対応の仕方や本校の体制や設備について確認・改善することができた。 ○夏の職員作業では、各分掌・学部・部門で内容や日時を決め実施した。 ○エコ点検、エコBOXを利用したり、野菜くずを捨てずに飼育委員会で利用するなど、TEASが定着している。 ○水道や電気の利用料を昨年度と比較して知らせ、意識付けを行った。 ○エコ点検をはじめ、エコについての取り組みが学級によって差がある現状がある。	B B	○ヒヤリハットの事例の共有や安全点検を定期的に行うことを継続し、教職員の安全への意識向上を図る。 ○火災と地震の避難訓練を計画し、実践を通して課題が挙げった場合は、改善しながら取り組んでいく。また、煙体験や起震車体験などを計画し、児童生徒が災害の怖さや対応の仕方を学べる機会を設ける。 ○職員作業について、早めに呼びかけ計画的に実施できるようにする。 ○各学部・部門で取り組んでいるエコ活動についてホームページでさらに取り上げるよう呼びかけ、TEASの意識付けを行う。 ○掃除道具の点検、整備を実施できるよう計画する。

様式 3

年 度 当 初						評 価 結 果 (10)月		
評価項目	部	評価の具体項目	現状	目標(年度末の目指す姿)	目標達成のための方策	経過・達成状況	評価	改善方策
「チームくらよう」の推進	情報教育部	○本校教育についての理解啓発につながり、指導支援の連携を密にしていくための教育活動の発信 ○児童生徒の端末の活用促進 ○ICTを活用した効率的な業務改善	○定期的に学校ホームページで教育活動について発信しより分かりやすいものとなってきたが、効率的な利用ができていない。 ○指導者用端末や児童生徒の1人1台端末整備の遅れがあるためICT活用による学習活動が十分に実施できていない。 ○ペーパーレス化が徐々に進んできたが、教職員のICTリテラシーの差があったり、トラブルへの対処などの問題があったりする。	○学校ホームページによる情報発信の充実を図るとともに、必要な書類がダウンロードできるようにするなど利便性を高める。 ○児童生徒の1人1台端末を活用とともにペーパー教材の他にデジタル教材を取り入れ、学校と家庭の連続的な学びができるよう効果的なICT活用の充実を段階的に図る。 ○教職員のフォローアップ研修や個別支援を継続しながら、学校全体としてICT活用による効率的な業務改善を図る。	○くらようダイアリーの定期的な更新をする。また、学校ホームページの内容やデザインレイアウト等リニューアルを行う。 ○ICT活用を効果的に生かした授業ができるよう研修を通してデジタル教材やその活用方法についての実践事例の紹介を行う。 ○ICT活用の教職員研修や個別のフォローアップやともに1人1台端末の利用の日常化に取り組む。各分掌業務の中でアンケートを実施する場合はグーグルフォームで行うよう呼びかけるなど啓発を行う。	○くらようダイアリーの定期的な更新をすることができた。学校ホームページの内容については6月に、デザインレイアウト等リニューアルについては夏季休業中にほぼ更新ができた。 ○情報教育部やICT支援員によるICT研修におけるアプリとその活用事例の紹介等を通じ、授業でのICT活用が促進され効果的な学習が進展してきている。 ○指導者用端末の整備が進んできており、グーグルドライブ等クラウドを使用して学部会や学部研究をはじめ、校務でのICT活用が日常化してきた。アンケートについても、QRコードからグーグルフォームで回答するなどデジタル化によって集計や分析等の効率化が進んだ。	B	○くらようダイアリーは引き続き定期的な更新をするとともに、閲覧した方に満足していただけるコンテンツに質的にも向上できるよう検討する。 ○学習用端末や指導者用端末の整備も進み指導者がより効果的な学習指導ができるよう引き続き研修や個別相談を行っていく。また「すらら」や「Loiloノート」などのツールを活かしながら学習者用として協働的な学びと個別最適な学びの実現を図る。 ○校務用パソコンおよび指導者用端末を活用してペーパーレス化とクラウドベースで校務の効率化のより一層の推進を図る。
	支援部（校内）	○適切な就学支援に向けた校内体制の充実	○児童生徒の実態の多種多様な変化等に加え、総合的な視点で検討される就学支援の考え方により、児童生徒にとって適切な学びの場の検討をすることが複雑化してきている。就学に関して、職員全体で共通理解をしたり校内体制を整えたりしていく必要がある。	○就学に関する判断基準を再度全職員で共通理解をし、一貫した視点で実態把握や検討を行う。 ※職員会、学部会、校内就学支援委員会において、判断基準(学校教育法施行令第22条の3、辻村報告、障害のある子どもの教育支援の手引き)を周知する。	○まずは、担当者を中心に支援部内で就学に関する情報を収集したり共通理解を図ったりする。 ○職員会や就学支援委員会、学部会等を活用し、就学に関する情報を校内で周知する。 ○校内就学支援委員会や体験入学・体験学習等で、就学支援の視点が生かされているかどうか、PDCAサイクルで確認する。	○就学について、まずは支援部で検討を行い、情報を整理したり校内への周知の仕方を考えたりした。その後、年度初めの職員会議や校内就学支援委員会で、就学に関する考え方、判断基準、流れなどを再度確認した。各学部への呼びかけも実施しており、今後もさらに検討が深まっていくようにしていきたい。 ○職員間で共通理解をしたことにより、体験学習が行われた際には、今まで以上に就学のポイントを意識した観察や検討がなされるようになってきた。	B	○校内の児童生徒の就学について、年間を通じて各学部で意識しながら進めていくとともに、必要に応じて迅速に見通しを持って取り組んでいけるように、具体的な年間計画作成の準備をしている。
	支援部（地域）	○教育相談の充実による適切な就学支援の促進	○センター的機能の活用により、就学に関する情報を園や学校に提供したり、幼児児童生徒への指導・支援について相談業務に対応したりした。今後も継続して活動し特別支援教育の充実を図ることで、学びの場の選択肢が広がっていくようにしたい。	○教育相談や体験入学・体験学習等で、園や学校、保護者の方に就学や指導・支援に関する情報提供等を行う。 ※体験、学校説明会、研修会等のアンケートで「参考になった」「」の回答が8割 ※1件の教育相談について、2回以上継続して相談対応を行う。(総件数の8割)	○それぞれの学びの場のメリット・デメリットを整理して伝えることで、園や学校、保護者の方の検討材料になるようにする。 ○教育的ニーズを把握し、実践につながりやすいように、具体例を挙げながら指導・支援方法について伝える。 ○コーディネーターを中心に、支援部や校内資源を活用しながら、教育相談に対応する。	○幼、小、中、高と幅広く教育相談を実施している。相談のあったケースでは継続した連携につながるように、次回以降の流れについても確認するようにした。また、依頼を受けるだけでなく、本校から各校へアプローチする機会も増やすことで、地域との連携の輪も広がってきている。 ○子どもの就学を検討する際の材料となるよう、体験学習等の機会を活用し、子どもの実態や有効な支援について地域校へ助言を行った。また、専門員等が集まる会でも中部地区の現状を共有し、今後の対応については話し合うようにしている。	B	○引き続き、教育相談等により地域校との連携を深めていく。
	キャリア教育部	○保護者への情報発信	○集合型の中部福祉セミナーを5年ぶりに開催できるように準備を進めている。また、先輩保護者から直接話を聞く座談会式研修会の準備を進めている。人権教育・交流や進路に関する保護者への情報提供の充実をさらに図る必要がある。	○保護者アンケートで5割以上が「研修会やセミナーに参加したり、キャリア教育だより等を読んだりして、進路や人権教育・交流に関する情報を得ることができた。」と回答する。	○中部福祉セミナーの開催 ○先輩保護者に学ぶ会(座談会)の開催 ○保護者対象視察研修の実施 ○保護者対象人権教育研修会の開催 ○キャリア教育だよりの発行	○中部福祉セミナーでは、参観日の午前中に開催したことや久しぶりの対面開催であったこともあり、小学部の保護者の参加もあるなど多くの方が参加された。 ○先輩保護者に学ぶ会(ほっとカフェ)では、先輩保護者であり倉吉市手をつなぐ育成会相談員の方にご来校頂き、卒業後のことを座談会形式で話してもらうことができた。 ○保護者対象視察研修では、参加人数が少なかったが、事業所の方に丁寧に説明して頂き、将来のことを考えるよい機会になったことが感想から伺えた。 ○キャリア教育だよりを月1回ペースでタイムリーに発行できている。	B	○保護者対象人権教育研修会を計画的に実施する。 ○キャリア教育だよりを今後もタイムリーに発行することに務める。